九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中村憲吉の最期と尾道 : 場所論として

荒木, 正見
福岡女学院大学 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/1683733

出版情報：福岡女学院大学紀要. 7, pp.1-24, 1997-02. 福岡女学院大学
バージョン：
権利関係：

「福岡女学院大学紀要」第七号抜刷
一九九七年二月

中村憲吉の最期と尾道

――場所論として――

荒木正見

中村憲吉の最期と尾道

――場所論として――

荒木正見

序

小論は、歌人中村憲吉が、なぜ尾道で終焉を迎えたかを考察するものである。もちろん、その理由は、文学論の一環として求めれば、吉田漱『中村憲吉論考』（六法出版社ほるす歌書、一九九〇年）に詳細に記されるように、『中村憲吉全集』（斎藤茂吉・土屋文明編、岩波書店、一九三八年／一九八二年）や、徹底した現地での取材を通して、中村憲吉その人の終焉の状況を再現すればよい。そして、『中村憲吉論考』ではその成果を簡潔適確に、それまでの静養先、郷里でもある広島県三次盆地の双三郡布野村という中国山地のほぼ中央からの転地、すなわち「冬、あたたかい内海沿岸への転地は、憲吉を心配する人の多くの願いであったが、結局親戚の矢野彦太郎、医師の高亀良樹氏等が何度か会合を重ね、検討してきめたものである。」（二三九頁）と述べられている。

これに対して小論の問題意識の一端には、哲学的場所論と文学論との比較とその統合がある。中村憲吉が尾道で終焉を迎えたその理由には、直接的には中村憲吉その人の状況と彼に直接まつわる人々の状況があり、それを研究

することが最も重要な課題であるとしても、それら直接的状況すべてを共同主観的に包み込む尾道とさらには当時の日本の普遍的な状況が存在する以上、そこにも彼の状況を説明する手掛かりはないだろうか、そしてそれらの考察が総合的に本来の意味を一層明らかに指し示すことになるのではないか、というのが小論の問題意識である。

このような構造的認識の手掛かりになる概念が、上田閑照『場所　二重世界内存在』（弘文堂、平成四年）における「二重世界内存在」である。それは、「世界の内に『於てある』我々は、世界の内にあることによって、世界の内にありつつ同時に、世界が『於てある』見えざる虚空に『於てある』」（三四―三五頁）と述べられるように、我々は常に自覚している場所と、その背景を成す無自覚的な場所との二重構造においてあり、その二重構造はありとあらゆる状況において存在するというものである。もちろんこの考察は西田幾多郎の場所論に因るものであり、従って、二重構造の「見えざる虚空」は究極的には唯一絶対かつ無限（区別がない）な存在そのものを指す。このような唯一絶対的存在を西田幾多郎『善の研究』（一九一一年）では「真実在」と呼び（『西田幾多郎全集　第一巻』岩波書店、一九四七／一九八七、六三頁）、後に『場所』（一九二六年）では、「場所」と呼ぶことになった（『西田幾多郎全集　第四巻』岩波書店、一九四九／一九八八、三一六頁）ことはいうまでもない。

ところで、このような構造を確認すると小論における方法論が陥り易い危険性が前以て指摘できる。小論の考察はとりわけ「見えざる虚空」の中に潜む意味を見えるようにするという作業であるから、一歩間違えば無理な推論になり、しかもそのことには気づきにくいという点である。その危惧する点に陥らない為にこそ小論では比較論的な考察を意識する。小論では特に、中村憲吉が歌人であったという事実を焦点に据え、その作品を常に意識しつつ考察を遂行する。

そしてこのような比較論的考察を遂行しようとして、いわゆる文学論的方法を顧みると、その方法それ自身に二重世界内構造があることに気づく。意識的考察の背後に眠る「見えない虚空」との比較を無意識的に試みているの

が、研究の実際であるとも言えよう。

かくして小論では、この「二重世界内存在」という概念に着目しつつ考察を進める。従って、最も中心的な視野としての個人的視野に対して、その背景としての社会的視野、自然的視野、歴史的視野、国際的視野等、さまざまな視野がまたそれぞれの関係を二重世界として維持しつつ関わっていく構造を意識しつつ進展することになる。

一

昭和九年（一九三四）五月五日午後七時四〇分、中村憲吉は、尾道市東土堂町、千光寺山腹の寓居で満四五歳の生涯を終えた。千光寺境内のすぐ下、千光寺所有の土地に今日もその家はほとんど当時のまま残っている。

明治三一年創刊の地元紙「山陽日々新聞」平成八年四月二〇日号には、平成八年（一九九六）、四月一九日に、この家、山中別邸の所有者、山中耕太郎氏

中村憲吉終焉の家

から亀田良一尾道市長に、この家を市に寄付する旨の目録が手渡されたことが報じてある。その記事によれば、その家の面積は中村憲吉の病室に当てられた木造平家建て三六・三六平方メートルと門に向かって手前左手にある木造瓦葺き二階建て延べ五六・一九平方メートルの二棟であるが、憲吉がいた当時にはそれに加えて北側に四阿屋があったとされる。この四阿屋は昭和五一年（一九七六）の風水害で失われたという。また、この建物は大正五年（一九一六）に建てられたもので、大正の終わり頃に山中耕太郎氏の祖父、善一氏が購入、憲吉に便宜を図ったのは、耕太郎氏の父、富夫氏であったと述べられている。

昭和八年（一九三三）一二月二五日、それまでの静養先であり、郷里でもある広島県双三郡布野村から尾道に転地して半年足らずを彼はこの家で過ごした。先ず、この短い間に詠まれた歌に彼にとっての尾道を考察する。

昭和八年一二月の転地の道中、彼としては珍しく道中の歌を詠んでいる。

「　臘月二十五日雪中出郷

ふるさとの雪ふる峽を出てくれば世の國はぬくし冬日照らせる

冬ぬくきみなみを戀ひて自動車（くるま）にて病む身をうつす吾が旅あはれ

道のべに湧井（わくゐ）ありければ藥服（くすりの）む水をもらひて車とどめき　」

（「輕雷集以後」『全集第一巻』四七〇頁）

彼にとっての尾道は、転地しなければならないほど「あはれ」な病身の彼に、また、道中も薬を服用しなければならないほど弱っている彼に、「冬ぬくきみなみ」によって象徴されるように生命力を補ってくれる期待を抱かせる場所であった。

また、この続きに相当する昭和八年々末に至る作品は次の通りである。

「　前うしろたすけられつつ石段に夕月ふみて山のぼり終ふ

山の庵の楠にやどれる椋鳥は木實喰ひ落す雨のごとくに
千光寺に夜もすがらなる時の鐘耳にまぢかく寝ねがてにける
病みながら旅のやどりに妻として歳をぞ守る夜ふかくして」

（「遺歌稿」『全集第一巻』六三九頁）

ここに詠われる尾道は到着して数日の違和感もあってか、悲喜こもごもである。寓居までの石段は難儀であったし、椋鳥の生命力には圧倒されている。また、鐘の音に悩まされ、家族愛に目覚めたりもする。視野の二重世界内性を考えれば、それは自分の感情という個人的視野とそのすぐ背景を成す尾道の風景や生活、そして家族の生活へと向かう視野である。この背景については後に考察する。

次に尾道に落ち着いてすぐ、昭和九年正月の歌には新年を単純に祝うというのではない彼の心情が垣間みえる。

「歳旦雑感

世のくらし理屈めき來て正月のこと祝ぎぐさも手短にすむ
いにしへの民はともしも祝ぐ年を腹つづみうちて實（げ）にたのしみき
季候にあはぬ暦（こよみ）はかへる要なきか暗きみ冬に新年をむかふ
病み臥せば吾（あ）に正月のかかはりなく今日はきのふの續きのごとし
病むわれに妻が屠蘇酒をもて來ればたまゆら嬉し新年にして」

（「輕雷集以後」『全集第一巻』四七一頁）

小論の視点を導入すれば、この一連の歌には、視野の二重世界内性が指摘できる。

先ず、最も自分の個人的な視野で詠まれたものは、「病むわれに」である。「アララギ」に拠った中村憲吉であるから、この歌をそれ以上に象徴的に読み込む必要は無いであろう。

次にそれらしく感じられる歌は、「病み臥せば」である。この歌の「今日はきのふの續きのごとし」は、昭和九年一月一日の日記に「腰痛依然」と記されるように（『全集第四巻』三七九頁）、個人的視野において病状が思わしくない状態を意味しているというのも真実であろう。しかしその一方で他の歌を比較すると、個人的視野と重なるその背景をも感じ取ることができる。この詳細については後述する。

さらに「季候にあはぬ」も同様に、個人的視野とともに背景を感じさせるものであるが、「暗きみ冬」の語は、「病み臥せば」よりも一層強くその背景を感じさせる。尚、この「暗きみ冬」には個人的視野としては、やはり昭和九年一月一日の日記に「粉雪ちらちらす」と記されるように（『全集第四巻』三七九頁）正月の天候の反映であるとも考えられる。しかし、大正一〇年（一九二一）満三二歳から大正一五年（一九二六）満三七歳までの短い間とはいえ大阪毎日新聞社の記者を勤め、「サンデー毎日」（大正一一年一〇月二九日―大正一二年四月二二日）に「財界諷詠」（『全集第一巻』六八五頁―六九九頁）という社会風刺の効いた歌を連載した彼の目にはさらにその背景が映っていたようにも思える。これは後に考察する。

「いにしへの」は、古人をうらやましいというのであるから、現状に対する批判的意識を内包することは言うまでもない。もちろん穿って言えばこれも病臥に伏す自分に対する個人的視野によるものであるとも言えなくはないが、その前の「世のくらし」や、前述の職歴など考え合わせれば、目先のことを越えた背景を想像することができる。これも後に考察する。

「世のくらし」は、主語が「世のくらし」であるから、まさに個人的視野の背景を成す「世」に目を向けた社会的視野によるものである。それが理屈めいてきた、正月、祝い事が手短にすむというのであるから、多くのことが想像できる。それらについても後に考察する。

取り敢えず、この「歳旦雑感」を視野の二重世界内性という視点から検討してみると、大まかな流れとして、冒

頭ほど社会的視野のような背景に対する視点が強く、徐々に段階的に個人的視野に移行しているように見える。仮にこの流れを踏まえて、詳細に背景を考察すれば、中村憲吉の尾道における意味が理解できよう。

さて、中村憲吉が新年を詠んだ歌は、他にまず「新春の雪」（「輕雷集以後」『全集第一巻』四七二頁）があるが、これは『中村憲吉論考』でも述べられているように（二四二頁―二四三頁）、大阪毎日新聞に掲載されたのが元旦であり、内容は布野における作品である。さらに正月の作品としては全集に補遺として収められた七首がある。

「あかときの海の日の出を拜まむとこの街山に人登りやまず　一月一日
旅にやむわが草の家に年祝ぎに來去に給へる人もさみしき　二日
旅の家に迎ふる年や山したの賑ふ町へ下りても行かず　三日
冬空の光のさむさ今日ひと日眼下海は氷れるごとし　四日
ふるさとは深雪とぞきくみんなみの此處の海邊の日の照る今日も　五日
寒行の山伏の法螺の音とよむ夜に入りたる山下の町に　六日
子供らは崖の上なる古寺にどやどやと登り歸り來れり」

（「遺歌稿」『全集第一巻』六四〇頁）

この七首を二重世界内性を意識しつつ先の「歳旦雑感」五首と比較すると、視野の二重世界内性が存在するにもかかわらず、背景の意味に相違があることに気づく。この七首は、いかにもアララギ派らしく、風景や生活に観察眼を発揮し、そこから情緒をにじみ出させている。その場合、背景としての世界は、目に見え耳に聞こえる尾道の風景であり、生活の姿である。もちろんこの詳細も考察しなければならない。そしてここから「歳旦雑感」五首を振り返ると、その五首がいかにも暗く、暗示的である印象を受ける。

尾道での歌は、このように年末年始に集中している。その後は、病状の進行もあって多くの歌を詠むことができ

なかった。

「　　窓前

病（や）む室（へや）の窓の枯木の櫻さへ枝つやづきて春はせまりぬ　　」

（「輕雷集以後」『全集第一巻』四七三頁）

が、風景を詠んだ作品であり、「輕雷集以後」にはその他に前年一〇月三〇日に死去した親友の画家平福百穂を悼む歌が三首収められている。この三首が親友を悼む個人的視野に強く包まれた歌であることは言うまでもない。

さて、これまで述べられて来たものは印象を中心とした文学的鑑賞であった。しかし、二重世界内性を考慮すれば、そこにはすでに背景を考察する手掛かりが示されている。ひとつは、尾道の風景や生活であり、いまひとつは、その尾道を包む社会や歴史の状況である。このことはおそらく尾道への転地そのものの理由を解く鍵でもあろう。次節ではこの手掛かりをもとにして、背景そのものの考察に入る。

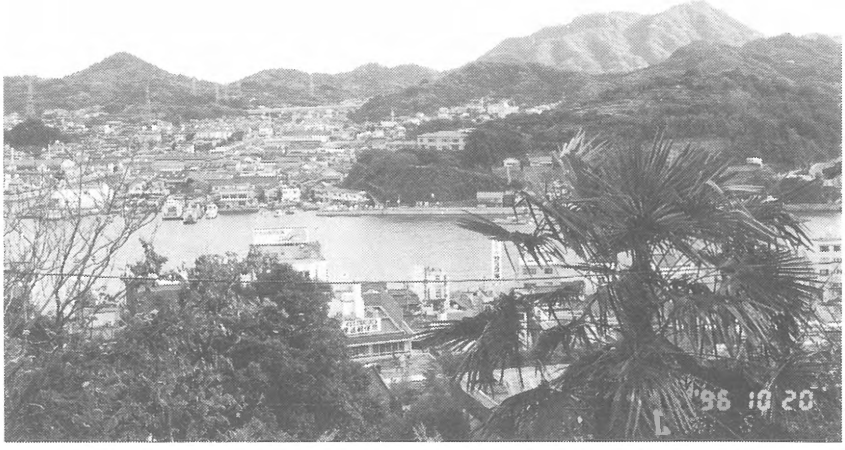
二

中村憲吉の歌と個人的視野の背景を成す中心に、その家がある。特に、先に挙げた「遺歌稿」七首のうちの「旅の家に」に示されるように、病気療養でほとんどの時間をその家で過ごす中村憲吉にとって、家は全ての個人的視野の背後に常に横たわっているといってもよい。その家は昭和八年一二月二六日（一九三三）の日記によれば「借寓、奇好の建物三小庵也」（「日記」『全集第四巻』三七六頁―三七七頁）と記されている。この三小庵の規模等については先に述べた。今日の住居表示で尾道市東土堂町一五にあるその家は、『中村憲吉論考』によれば、先に述べたように、当時、山中善一氏の別荘で、この山中家は「江戸期富吉屋半六というのを略して富半というのが屋号で現

在は洋品店」（二三九頁）と述べられる。今日、十四日元町二七の「紳士服富半」にその屋号を見ることができるが、土堂一丁目、土堂二丁目、十四日元町、久保一丁目、久保二丁目と続く細長い商店街は古くからの街道沿いの商店街である。特に明治以降、この商店街の商家はこぞって千光寺の南斜面に別荘や隠居屋敷、従業員の宿舎、貸家などを作った。この別荘もその一軒だといえる。『中村憲吉論考』によれば、山中善一氏は改造、改装など献身的な好意をもって中村憲吉を迎えたのである（二三九頁）。このことが当時の尾道商人の経済力と文化的関心を象徴しているのはいうまでもない。

この家を焦点にして問題はふたつに分かれる。

まず、その家の状態や在りか、場所といった地理的背景である。アララギ派の歌人中村憲吉にとって、目に映る風景は作歌上重要な意味を持つし、その観察的感覚は研ぎ澄まされている。まして、病気療養において外出もままならぬ身である。この事情を顧みて、寓居を千光山の山腹のそれも数百段の石段を上らなければならない場所に定めたのである。『中村憲吉論考』によれば、「条件



中村憲吉旧居付近から見る尾道水道

は採光通風、眺望のよいこと、なるべく閑静な所」（一三九頁）と記されている。この条件が尾道に合致したこと、それが尾道転地のひとつの理由であるが、それが、中村憲吉の作品にどのように反映しているか、また、尾道という町の本質的意味とどのように関係しているかについては後に考察する。

次に、当時の尾道商人の経済力の問題である。これは単に家を提供できたというのみならず、文化的関心、医療水準の問題などの尾道全体の状況と関係する。これはその時代の社会的背景であると同時に、歴史的背景でもある。そしてもちろんこのような社会的背景を支えているのが日本全体という社会的背景である。

本来無限に連続する背景だけにこのように問題の因果をたどればきりがないが、その焦点は常に中村憲吉その人にある。従って、彼の状況と作品から必要な背景を浮かび上がらせつつ考察を進める。

まず、家や風景、地理的条件などであるが、第一に特筆すべきは、寓居の場所が、標高一三六・九メートルの千光寺山山頂一帯に広がる千光寺の境内のすぐ下隣りだということである。それも、「旅の家に迎ふる年や」に歌われ、また、昭和九年一月一日の日記に「千光寺山へ上り初日拝する人多数足音す」（「日記」『全集第四巻』三七九頁）と記されるように、先述の繁華な土堂商店街から千光寺本堂へ上る最短の石段のすぐ脇である。先の「千光寺に夜もすがらなる」の歌は、この家の傍らに建てられている碑にも刻まれているが、千光寺の近さを感じさせる。この歌によると彼は近い鐘の音をうっとうしく感じている。到着した当夜は昭和八年一二月二六日の日記に「雑音眠を驚かす」（「日記」『全集第四巻』三七六頁）と記されるように、慣れるまでは「閑静」には少し足りないようでもある。しかし、正月の「あかときの」の歌や、「子供らは」の歌には千光寺における初詣の賑わいや生き生きしたお参りの様子を反映し、これに関しては中村憲吉の生命力を喚起する様子が感じられる。また、山の植物の推移は「病む室の」に歌われるように、生きる希望さえ与える。「冬空の光のさむさ」で歌われるような、尾道水道を眼下にした南向き斜面の標高が「採光通風、眺望」という条件を満たし、尾道市民に親しまれている千光寺の賑わいや、生

きる力を与える自然の営みが、中村憲吉にとってふさわしいものであったことは言うまでもないが、では、それらの環境はいかに形成されて来たのであろうか。

この千光寺は、文化一三年（一八一六）に亀山士綱の手によって完成した『尾道志稿』（昭和九年、越智正通校訂版による）ではその開基、中興については次のように記されている。

「千光寺　眞言宗　○大寶山、權現院、千光寺は西國寺末院にて、開基しれかたし。或は平城天皇大同元年丙戌とも云。中興は多田滿仲公宿願ありて造立ありとぞ。」（「巻之六」六九頁―七〇頁）

これに対して『尾道市史　第六巻』（青木茂編、尾道市役所、昭和五二年）では、開基と中興の双方に確証がないと述べている（五七頁）が、『尾道市史　第一巻』（青木茂編、尾道市役所、昭和四六年）では資料を溯って、すでに室町時代の一五世紀半ばには相当な勢力を持ち交易に携わっていたことが示されている（四七三頁―四七四頁）。発掘資料などからも、当地には古代からの信仰があったことは事実であろう。

また、『尾道市史　第六巻』では、この千光寺が修験道との繋がりが濃いことが述べられているが（五八頁）、「寒行の山伏の」の歌にもそれが感じられる。

ところでこのような千光寺の歴史的背景以上に、その風景が特筆されなければならない。『尾道志稿』でも「當山は南海渺々として豫州石鉄山まで見へ渡れり、島嶼幾つもなく放眸の中に入て、實に當境第一の佳景なり。」（七二頁）と述べられている。

足利尊氏が尾道を重視し、浄土寺に参籠したのが建武三年（一三三六）であるが、建徳二年（一三七一）足利家の武将今川了俊が、鎮西探題として九州に赴任する際に記した紀行文『道ゆきぶり』には、尾道の風景を「この所のかたちは北にならびて。あさぢ深く岩ほこりしける山あり。ふもとにそひて家々所せくならびつゝ。あみほすほどの庭だにすくなし。西よりひんがしに入うみとをく見えて。朝夕しほのみちひもいとはやりかなり。風のきをひ

にしたがひて。行くる舟のほかげもいとおもしろく。はるかなるみちのくつくし路のふねもおほくたゆたひゐたるに。一夜のうきねする君どものゆきてはきぬるかこのうかびありくも。げにちいさき鳥にぞまがふめる。」（「道ゆきふり」、『群書類從・第一八輯』塙保己一編、續群書類從完成會、昭和三年／昭和三四年、五五九頁）と、情趣豊かに記してある。

江戸時代に入ると、瀬戸内海海運の中心地として尾道は一層繁栄し、司馬江漢が天明八年（一七八八）江戸から長崎に遊学途上の記録を著した旅日記『西遊旅譚』（寛政二年（一七九〇））（復刻版『江戸・長崎絵紀行　―西遊旅譚―』国書刊行会、平成四年）では、「富商多し西の小江戸と云よし」（復刻版七四頁）とも記してある。その後、一九世紀初頭の文化文政年間には、尾道や鞆が当時流行した金毘羅参りの船出の拠点となったこともあって、今日千光寺山の「文学のこみち」にその碑がある「登千光寺山」などの詩を残した頼山陽などの文人の往来が相次ぎ、尾道の風景の美しさが広まった。また、尾道にも、近年、入船裕一『尾道今昔』（ぎょうせい、一九九五）や池田明子『頼山陽と平田玉蘊　江戸後期自由人の肖像』（亜紀書房、一九九六）などの地域の研究によって実像が明らかにされつつある平田玉蘊のような、中央にも名が知られた女流画家を輩出した。先述の『尾道志稿』も、そのような文化的興隆のなかで執筆されたものである。

なかでも、今日千光寺の鐘楼横にある「瘞紅碑（えいこうのひ）」の由来は象徴的である。田能村竹田、橋本竹下などによって記された碑文によればその経緯は次の通りである。天保五年八月一日（一八三四）、当時尾道に滞在していた田能村竹田は、ほぼ百日の滞在の間、毎日生けた花や枝の枯れたものを数十種集めて、千光寺の庭に瘞（うず）め、「瘞紅歌」すなわち「花を葬る歌」を石に刻み、友人たちと酒を注いで供養したのである。このような風雅が当時の尾道の文化的風潮であった。

さて、後述するように幕末維新の混乱を経過しても地域における尾道の経済的文化的優位は継続した。明治二一

年（一八八八）に公立商業学校としては全国一四番目という尾道商業学校が設立されたのはそのひとつの象徴的出来事である。『尾道市史　第三巻』（青木茂編、尾道市役所、昭和四八年）によると尾道の市政施行は明治三一年（一八九八）であり、同書挿入資料の「明治二九年（一八九六）　市制施行之稟請」によれば、明治二八年（一八九五）当時の人口は二〇、一六四人とされている（三八七頁―三八九頁）。これに先立つ明治二七年（一八九四）、日清戦争が始まった年に、千光寺山には共楽園という遊園地が開かれた。これが今日の千光寺公園の始まりである。交通が不便なこの時代に標高百メートル近い山上に公園が開かれたのは、ひとえにそこから見下ろす尾道水道の風景を楽しみ続けてきた伝統があったからにほかならない。昭和九年一月四日の中村憲吉の日記に「朝起きて公園の鳥猿の檻の所迄散歩す。」（「日記」『全集第四巻』三七九頁）とあるが、そこが今日も猿山や菊人形館、市立美術館やホテルなどを有する総合公園であることはこの地形に裏付けられた風景によるといえよう。

明治時代の当時、日本でもまだ珍しい名所案内が尾道で発刊された。当時の備後尾道町賛同協会幹事長横山亮一編の『備後尾道名所案内記』（明治二八年）（復刻　一九八二年、児島書店）がそれである。多くの商店や旅館の案内で埋められたこの小冊子に簡略に述べられた尾道の案内文には、当時の尾道の、そして中村憲吉の時代にまで至る、近代の尾道のセールスポイントとも言うべき幾つかの点が指摘できる。まず同冊子には、「山陽鐵道岡山廣島両驛の中央に在る中國無二の一大良港にして海陸運輸の便四通八達し瀛車瀛船の往來出入晝夜間斷なく物貨の集散商業の殷盛敢て五港に讓らす（さんようてつだうをかやまひろしまりゃうゑきのまんなかにある　ちゅうごくならびなきのよきみなとにして　うみをかうんゆのびんどこまでもとどき　きしゃきせんのゆききでいりひるよるたへまなく　しろもののでいりあきないのさかえなる　あへてごこうにまけぬ）」（一頁、分かりやすい言葉に代えて振り仮名が付けてある。）と、商業交易が盛んな様子が述べられている。その上で「地勢は山を負ひ海に臨み前灣向島を横へ一海峡を成し空氣新鮮にして氣候平和夏涼しく冬暖かに傳染病の流行等極めて稀なり（ちせいはやまををひう

みにのぞみ　まへのうみむかひしまをよこたへいちせとをなし　くうきあたらしくきこうへいわなつすゞしくふゆあたゝかに　うつりやまひのはやることきはめてまれなり)」(一頁、同)と述べられるが、これまで歴史的に述べられてきた風光明媚といった記述が後に控えはするものの、このような健康的な保養地といった記述は明治時代以降の近代的な感覚に訴えるものである。また同冊子には尾道の商店の五〇件の宣伝中、製薬および薬品販売の宣伝が八件掲載されている。このような当時の尾道商人のイメージ作りがこの冊子に反映されているといえる。

このように千光寺を軸に尾道を考察してくると、尾道水道を眼下に見下ろして聳える千光寺山の風光が古来文化的集積を導き、それがそれぞれの時代に彩られて独特のニュアンスを持って人々に認識されて来たことがわかる。特に明治以降は、文化文政時代の風雅に加えて、実利的な意味合いを持った健康的な保養地であることを認識させてきたのであった。中村憲吉の死に先立つ一二年前、大正一一年一二月二三日(一九二二)、当時著名であったひとりのスポーツマンがやはり尾道に療養に来て久保町吉祥坊で息をひきとった。それは柔道家西郷四郎である。富田常雄の小説『姿三四郎』(昭和一七年=現在手に入るものは、『姿三四郎』「天の巻・地の巻・人の巻」講談社、大衆文学館、一九九六年)は昭和一八年(一九四三)に黒澤明監督のデビュー作として映画化されて一世を風靡することになるがそのモデルがこの西郷四郎である。会津生まれで、山嵐という荒業で名を為したが、大正九年(一九二〇)に病気療養のため尾道を訪れ、その二年後、五七歳で死去した。中村憲吉の療養の地を布野村の近くに探そうとするときにも、このような療養地としての認識が働いたと思われる。

ところで、各時代のそのような文化的集積は経済的根拠なしにはあり得ない。すでに、島嶼に囲まれた天然の良港であったり、瀬戸内海航路のほぼ中央という位置によって港湾の機能を中軸とした経済的な繁栄が持続的に得られて来たことは先に記述してきた通りである。しかし、いま中村憲吉その人を振り返る時、経済の推移は単なる文化の担い手としてだけではない。中村憲吉の個人的視野をそのまま表現するものは、作品や日記、書簡などである

が、先に述べたように「歳旦雑感」にも、社会的な背景が窺える。

たしかに中村憲吉が尾道に来たのは、そこが保養地にふさわしい土地柄であり、また、文化的にも優れた土壌とも関連して、昭和九年三月三一日付けの斎藤茂吉宛ての書簡にも記されるように（「書簡」『全集第四巻』七六四頁―七六五頁）、学会に熱心に出席し地域医療にも多忙ながら親切な診療を欠かさない高亀（こうがめ）良樹博士の存在が大きいことも言うまでもない。しかし、その事実的背景の他に、中村憲吉自身の個人的視野の内面的背景を成す事柄にも着目しなければならないのではないか。

中村憲吉の多くの作品が、アララギ派特有の身近の細かい情景に心情を重ねるものであることはいうまでもないが、彼の描写に見られる個人的視野のひとつの側面が、社会的視野、もしくは庶民的視野であることは見逃せない。例えば昭和二年（一九二七）、大正天皇崩御の際、「おほきみの御大葬（おほみはふり）の過ぎながら雪はますます降りてひそけき」（「輕雷集」『全集第一巻』三四九頁）と歌いつつ、他方で「雪ふかき山おくの里へ大御代の替（かはり）を觸（ふ）れに行きて死にける」「まづしくて兒をやしなへば文使（ふづかひ）に深雪（みゆき）をかしぬ手弱女（たをやめ）にして」「寡婦（やもめ）にて貧しと云へど亡骸（なきがら）に二幅（ふたの）なきまで身をしのびたる」（「輕雷集」『全集第一巻』三五〇頁）と、崩御の知らせを届けようとした女性の配達人の凍死事故を歌うのである。このような視野を持っていたからこそ、毎日新聞の社員ともなったのであろうし、新聞社勤務がこのような視野を磨いたともいえよう。

さて、このような中村憲吉の個人的視野の背景が社会情勢である。これは他方で、これまで述べて来た尾道の経済的状況の推移の背景でもある。また、日記に頻繁に記されるように病床にありながらも中村憲吉はラジオを愛聴し、そこから社会に対する情報を入手していた。従ってここでは、中村憲吉の生きた時代を尾道の時代的推移と重ねつつ辿り、最後に中村憲吉が過ごした尾道の時代的意味を考察する。そこに、「歳旦雑感」の真の意味が読み取れ

るのではないか。

以下『中村憲吉論考』の年表によれば（二五六頁―二六四頁）、中村憲吉は明治二二年（一八八八）一月二五日、広島県雙三郡布野村に生まれた。先に述べた尾道商業学校が開校した翌年に当たる。この年四月一日、尾道は町制を施行するが、同年二月一一日には大日本帝国憲法が発布され、日本は帝国への道を歩み始める。尾道ではその後、明治二四年（一八九一）に山陽鉄道の福山―尾道間が開通し、翌明治二五年（一八九二）には尾道商業会議所が全国で三〇番目に認可されている。その二年後明治二七年（一八九四）には日清戦争が勃発、明治二八年（一八九五）には下関（馬関）で日清講和条約が結ばれることになる。中村憲吉の幼年時代はこのように日本が初の対外戦争を遂行し、勝利することによって産業構造や国家体制が一気に近代化に向かった時代であった。幼い中村憲吉は地方のエリートとして、当面は学業の習得に指向する。

明治三七年（一九〇四）から明治四一年（一九〇八）には日本は日露戦争を戦ったが、その間中村憲吉は明治三九年（一九〇六）に広島県立三次中学校を卒業し、鹿児島第七高等学校に入学している。中学校の時から始めた文学活動であったが、明治四〇年（一九〇七）、満一八歳にして作歌を始めることになる。これまで順調に学業をこなしてきた彼は、明治四二年（一九〇九）欠席過多で落第することになる。翌年には卒業し東京帝国大学法学科大学経済科に入学するのであるが、落第にしろ、上京にしろ、その原因や動機に高等学校時代にすでに全国新聞の応募に連続入選した力量を持つ歌があることはいうまでもない。そして、徐々に「アララギ」への傾倒を強め、また、大正二年（一九一三）には、歌集『馬鈴薯の花』を刊行しているが、そのころ恩師伊藤左千夫が五〇歳で死去する。

東京帝国大学を卒業したのが大正四年（一九一五）、第一次世界大戦勃発の翌年である。同年郷里で結婚したものの東京に職はなく、大正五年（一九一六）に帰郷して父親の事業を手伝ったり財産管理などをするとともに、第二歌集『林泉集』を刊行する。作歌活動に関してはアララギ派の歌人たちとの交際が深まり、島木赤彦、古泉千樫、

斎藤茂吉等とともに「アララギ」を支えていくことになる。そして、大正一〇年一一月（一九二一）、満三二歳にして大阪毎日新聞社経済部の記者となる。

先に述べたようにこの就職は、彼に社会に対する目を開かせることになるが、それは急に訪れた訳ではない。この間の心境の変化について彼自身の第三歌集『しがらみ』（大正一三年）の「編輯雑記」で次のように述懐している。

まず学生時代について、彼が『林泉集』に歌ったような「超脱的で、また、四圍の世界に對して、何等の屈託なき、縹渺たる陶酔気分」や「不規律で頽廢的な實世間の生活には全く根を持たぬ、放肆（ほうし）な生活」であったと述べている（「しがらみ」『全集第一巻』二四五頁―二四六頁）。

その上で卒業後帰郷してからの生活を次のように述べる。まず彼が感じたことは、「急に身邊に多くの家族の煩累（はんるい）のあるのを感じると、予も今迄とは違っておのづから重い責任ある生活のうちに起居せねばならぬを感じた。」（「しがらみ」『全集第一巻』二四六頁）というように、家族に対する責任であった。次に彼が感じたことは「四圍が急に狹まって俄かに現實的になったやうな氣がした。」（「しがらみ」『全集第一巻』二四七頁）というような現実感であった。彼はこれらの変化には当初とまどいを感じている。しかししばらく経つにつれ彼は「次第に今迄全く無關心に過して來た實世間の通俗生活について、初めて此處でその眞義と興味とを知ることが出來た。同時にこの鄕村の山川草木と土俗人情とのうちに、從來感知しなかった、新しい深い姿の潜在するを發見することも出來た。」（「しがらみ」『全集第一巻』二四七頁）と、いわば実世界の真の意味に目覚めるのである。それは、「悠久なる自然につつまれて流轉する人一代の始期と終期とに亙る諸相は元より、更に數代に連續する人間生命の開展をもしみじみと通觀することができる。」（「しがらみ」『全集第一巻』二四七頁）という雄大な存在認識であるとともに、縁の薄い他人とも没交渉ではありえない田舎の生活を「人と人との心が深く強く聯結されてゐる、眞意義ある人間社會生活」（「しがらみ」『全集第一巻』二四八頁）という共同体認識でもあった。この後者が先述の大正天皇崩

御の際の作歌に密接に連続することはいうまでもない。

その後、彼が大阪という都会に出なければならなくなった心境は、この実世間との共同体認識の発展であった。彼は「社會的にも自己に對しても、予の受けた専門教育に報ずるべき責任」のため、また、放肆な過去に対して「もう一度繁劇な廣い社會へ出て働いて、これ等の悔恨を償いたい」ためにふたたび就職活動を行い、大阪毎日新聞社に就職するのである（「しがらみ」『全集第一巻』二四九頁）。

このようにたどって来れば、彼の社会的視野がすでに布野村に帰郷している間に育てられたことが分かる。それは、都会特有のまたイデオロギー的な意識過剰気味の社会的視野ではない。伝統や民俗に根を下ろした、庶民的視野ともいうべきものである。大正一〇年（一九二一）の師走の風景を歌った「街頭歳暮」の一首「年の暮（くれ）のあはれを知りぬ市（いち）に出（で）て人に交（まじ）りてわが聞き行けば」（「輕雷集」『全集第一巻』二六二頁）には彼の仕事ぶりと庶民的視野とが現れている。

その後大正一五年（一九二六）、満三七歳の時、父親が隠居し家督相続のため退職するまでの四年半を彼は記者として過ごすことになる。この間に経験したのが大正一二年（一九二三）の関東大震災である。「震災後の數カ月は新聞社で、ことに經濟方面を擔當してゐる、予の生活は頗る繁忙を極めた。」（「しがらみ」『全集第一巻』二五三頁）と述べているように、まさに記者ゆえの多忙さの中で彼の生活は終始した。短い記者生活のただなかで、このような大事件に出くわしたことは彼の社会的視野を一層磨き上げたといえる。震災を歌った「関東大震火災」の一連の二十首の歌は、「み空かぜよるに入るかぜは吹きつげど都（みやこ）のたよりもたらす聲なし」という不気味な現実感で始まり、徐々に入る情報に、「横濱が燒けほろぶ云（ち）ふ聲きこゆ夜ふかくして潮岬（しほのみさき）より」と恐怖が募り、そして、「今日もまた日照（ひでり）はあつし燒土（やけつち）の都の人ら蔭無（な）みにあらむ」と被災地の人々をいたわり、「朝あさの道に露けき鴨跖草（つゆぐさ）やありがたく生くる我を思ふも」と生命の貴

さで締めくくっている（「輕雷集」『全集第一巻』二六五頁―二六八頁）。この現実感の充実は単に彼の技術のみではなく、見るべきものを正確に見る視野の為せるものである。

帰郷した彼は、すでに著名な歌人として全国に知られ、歌会や講演や取材などに多忙な日々を送る。しかし、昭和四年（一九二九）暮れ、満四〇歳の彼はその後肋膜炎と診断される病気に侵されていることに気づく。これが結局彼の生命を奪うことになるのである。翌年、翌々年と、病をおして全国の行事や取材に多忙な日々を過ごすが、病状は徐々に悪化、昭和七年（一九三二）から昭和八年（一九三三）にかけては広島市外高須や五日市に転地療養し、昭和八年（一九三三）七月に一度布野村に帰ってから、その年の暮れに尾道に転地、翌年五月五日に死去するのである。

さて、このようにして彼の人生において形成された社会的視野であるが、その時代を尾道はどのように過ぎていたのであろうか。おそらくは尾道という場所から世界が見えるであろうし、最後に尾道にたどり着いた中村憲吉と、尾道の時代的意味が重なる時に、「歳旦雑感」の背景が見えてくるのではないか。

中村憲吉が生まれた明治二二年（一八八九）は、先述のように大日本帝国憲法が発布された年である。この年の四月一日には全国に市町村制が施行された。かつて県庁所在地を争った県内のライバルである広島がこの日市政を施行したのに対し、尾道は合併問題が難航し、町政を施行した。すぐに市制施行に向かって始動した尾道町が提出した「市制町村制施行の答申」が『尾道市史　第三巻』に掲載されているが（三六八頁―三七一頁）、その第二条によると、当時の戸数は四二四九戸、人口一七九四九人とされている。また、地方税は年に「一万四五千円ノ多キニ至ル」とされ多額納税の理由は、人口が多いことと商売繁盛によるとされている。しかし、第五条には商業繁盛がいささか衰退の兆しもあると述べられ、その理由は港湾への土砂の堆積によるとされている。それに対して、明治二十年（一八八七）から港湾の浚渫に努力している由、述べられている。

この浚渫は記されているとおり、尾道にとって重要な課題であった。明治二四年（一八九一）には山陽鉄道の福山～尾道間が開通し、交通は新たな時代を迎えようとしてはいたが、大量輸送の手段としての航路の優位は継続していたのである。先立つ明治一七年（一八八四）に設立された大阪商船株式会社は近代的な大量輸送を瀬戸内海を中心にして展開したが、尾道は創立と同時に開設された大阪～広島航路の寄港地であった。また、先にも述べたように明治二七年（一八九四）には日清戦争が勃発し、その意味でも将来に向けて大量の物資の輸送が求められた。『尾道市史　第三巻』によれば戦争中は物価の高騰、労働力の不足などで遅れ気味ながらも工事は続けられ（六七四頁―六七五頁）、結局この一連の浚渫工事は明治三二年（一八九九）までかかったが、その間明治三〇年（一八九七）に鉄道連絡船尾道～今治航路が開設され、また、明治三六年（一九〇三）には尾道～多度津航路が開設されるなどの成果を上げている。

尾道の市制施行は明治三一年（一八九八）であるが、その時の戸数が四六七九戸、人口が二一七九一人であった。『尾道市史　第三巻』に掲載されているこの際の「市制施行之稟請」には同規模の市との納税額の比較が出ているが（三九〇頁）、それによると尾道の国税は三七七二・五八三円で、地方税が一一〇五三・〇七二円である。これに対して例えば久留米の国税が五〇五九・七三四円で地方税が一〇九六七・〇七〇円であり、宇都宮の国税が四四八二・二七七円、地方税が一〇八四五・一〇五円である。また、佐賀の国税が五〇三二・九六七円で地方税が七八三七・〇〇〇円であり、高松の国税が四八三〇・七四二円で地方税が七二五二・八二三円である。尾道の経済力は各地の県庁所在地に勝るとも劣らないものであることが分かる。

尾道の港湾整備は、すぐに一層の経済発展を意図して国際港を目指して動き始める。そして、第二種重要港湾に指定され、開港場指定、すなわち国際港として認められたのが昭和二年（一九二七）である。その間には大正一〇年（一九二一）に朝鮮郵船会社の尾道と朝鮮の仁川を結ぶ航路も開設されたし、翌年には三菱商事船舶部の朝鮮航

路が尾道寄港を開始している。明治以来着々と港湾整備計画を実現していった背景には、それが可能な経済力があったとともに、港湾整備が尾道の生命線であるという認識があったことにほかならない。

もちろん我が国の歴史を顧みれば、明治末期から昭和初期のこの時代は、日清、日露両戦争、大正三年（一九一四）から大正七年（一九一八）の第一次世界大戦、そして、大正一二年（一九二三）の関東大震災と、経済的には混乱した時代でもあった。戦争や災害があれば物価は急騰する。尾道でも特に大正七年（一九一八）は米価の急騰による米騒動を経験している。しかし、総合的にみて、この時代の尾道は時代の波に乗って豊かに推移していたといえる。世界情勢の変化による港湾を軸とした尾道の経済的意義の増加、それを強化しようとする港湾整備事業による人口の流入などがその直接的理由に上げられる。『瀬戸内の港町の歩みのあと　太平記から今日まで』所収の年表によれば、西郷四郎が死去した大正一一年の尾道の乗合自動車数は一一台、貨物自動車九台、自転車一〇五〇台、尾道駅乗降客数は一一三一三六八人、芸妓九四人と記されている（一八三頁）。また、昭和四年（一九二九）から始まった世界大恐慌の最中にもかかわらず、昭和五年（一九三〇）には三井物産、三菱商事の両社が尾道出張所を開設している。

しかし、この大恐慌を契機として政治の世界では第二次世界大戦の予兆ともいうべき事件が頻発している。大正一五年（一九二六）に退社した中村憲吉が病気をおして各地で講演や作歌活動を続けている時期は、世界大恐慌が起こり、昭和六年（一九三一）には満州事変が起こり、昭和七年（一九三二）には五・一五事件が起こり、昭和八年（一九三三）には日本が国際連盟から脱退している。京都大学滝川事件、小林多喜二獄死事件もこの年である。岩手県で自らの内外面に小宇宙を作りつつ宮沢賢治が没したのも昭和八年である。中村憲吉の死去二カ月前、昭和九年（一九三四）三月には満州国が皇帝溥儀を立てて帝政を実施している。日記にはほとんど時事を記さない中村憲吉であるが、連続して日記をつけている昭和八年、昭和九年には国際連盟脱退や満州帝国の発足などを記録して

いるように、（「日記」『全集第四巻』三二六頁・三九〇頁）、それらの世界の動きは、新聞記者経験のある感性にとって不穏なものが感じられたことは想像するに難くない。

だが、彼が時の政府の方針に反対した歌人であったかというとそうではない。昭和八年（一九三三）の正月の歌「歳首有感」によれば（「輕雷集以後」『全集第一巻』四四四頁―四四五頁）、

「天（あめ）がしたに國歩（こくほ）をたもつ時あやふし四方（よも）をいましめて年あけむとす」

「ひむがしに興（おこ）らむ國をはばまむや紅毛（こうまう）の國らなにを謀議（はか）るぞも」

といった国粋主義的な側面も見せ、素直に時代の流れを肯定してもいる。

これは、収録された歌集「輕雷集以後」の齋藤茂吉による序でも明らかなように、新聞雑誌に公表された作品を死後に編集したものであり（三七九頁）、公表した新聞雑誌の性質や意図にもよる点があるとも思われるが、やはり彼は国家体制に関しては当時の大多数の日本国民の心情と近いところにいたと思われる。そして、これまでの庶民的な視点を考えれば、この「歳首有感」にしても世の不穏な動きに対して

「さがしかる世相（よさが）にあへてきほはねど去年（こぞ）も今年も病めば嘆かゆ」

「立つ年と今朝しづかなる日かげさし病の床を清しからしむ」

と締めくくり自分に籠もってつかの間の幸せを味わうのである。

このような屈折した心理をも背景にして考えれば、先の「歳旦雑感」の「世のくらし」や「いにしへの」の歌には、社会批判を感じさせ時代の流れに竿さすような視点から、目先の問題の底にある庶民の暮らしに基盤を置こうという姿勢が表現されていることがいっそう理解できる。時代に流され、時には立ち止まり振り返ってその時代を疑ってみる。これが庶民である。

さて、このような歴史的状況のなかで最期を迎えようとした中村憲吉と尾道とが出会った。それは彼の意志とい

うより周囲の意志によって起こった偶然ではあったが、二重世界内的構造として考察しようとするとき、そこには共時的に働く存在構造の特殊な様相が指摘される。

すなわち、まず彼の個人的視野に飛び込んで来る風景は、歴史的にも風光明媚で名高い尾道水道の風景であり、千光寺の自然、そして、風物である。さらに彼の意識に滲み出てくる背景には、歴史によって培われて来た文化的蓄積があり、さらにその背景を成す世界の大きな歴史的変動があり、それが尾道の諸条件とあいまって尾道独自の影響を与え、世界的不況の最中にもかかわらずむしろ活気に満ちた都市である印象を与えた。これが、直接的には、温暖な風土とともに信頼できる医療を期待させた。また、人々を身近に見る彼の庶民的な視野も人里離れた保養地ではなく、このような活気ある町にふさわしいものであったといえる。彼が暮らしていた三次盆地布野村から言えば海への出口に当たる尾道がたま〳〵このような諸条件を備えていたこと、このすべての構成が彼をその最期に呼び寄せたといえよう。

結び

このように中村憲吉がその最期を尾道で迎えたというその状況を、彼の個人的視野とその背景を成す地理的、歴史的視野との二重世界内存在性として捉えてみると、その状況が単なる偶然に終わらないことに気づく。また、その状況を中村憲吉自身が自分のものとして捉え直して作歌活動に生かしているという事実も見えてくる。常に、その中心には歌人中村憲吉の歌がある。さらに日本中を巡りながら詠われた多くの歌のそれぞれに二重世界内存在性が反映していることを思えば、残された今後の課題は大きい。

＊主な引用・参考文献一覧（初出順、頁は本文中に記載）

・吉田漱『中村憲吉論考』六法出版社ほるす歌書、一九九〇年
・斎藤茂吉・土屋文明編『中村憲吉全集』岩波書店、一九三八年／一九八二年
・上田閑照『場所　二重世界内存在』弘文堂、平成四年
・『西田幾多郎全集　第一巻』岩波書店、一九四七年／一九八七年
・『西田幾多郎全集　第四巻』岩波書店、一九四九年／一九八八年
・「山陽日々新聞」平成八年四月二〇日号
・亀山士綱『尾道志稿』文政八年、越智正通校訂版、昭和九年
・青木茂編『尾道市史　第六巻』尾道市役所、昭和五二年
・青木茂編『尾道市史　第一巻』尾道市役所、昭和四六年
・今川了俊「道ゆきぶり」塙保己一編『群書類従・第一八輯』續群書類従完成會、昭和三年／昭和三四年
・司馬江漢『西遊旅譚』寛政二年、復刻版『江戸・長崎絵紀行　―西遊旅譚―』国書刊行会、平成四年
・入船裕二『尾道今昔』ぎょうせい、一九九五
・池田明子『頼山陽と平田玉蘊　江戸後期自由人の肖像』亜紀書房、一九九六
・田能村竹田、橋本竹下など「瘞紅碑碑文」天保五年
・青木茂編『尾道市史　第三巻』尾道市役所、昭和四八年
・横山亮一編『備後尾道名所案内記』明治二八年、復刻版　児島書店、一九八二年、
・富田常雄『姿三四郎』昭和一七年、『姿三四郎』〔天の巻・地の巻・人の巻〕講談社大衆文学館、一九九六年